
Clumsy bonds

紫霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C l u m s y b o n d s

【Nコード】

N 2 3 1 5 H

【作者名】

紫霧

【あらすじ】

この世界には魔力というもので満ちている。それは人であったり、エルフであったり、獣人であったり、動物であったり、木々であったり、そして大気であったり。それが神族や、魔族だったり。『在るもの全てに魔力が存在する』そんな世界。大昔、ある人物が魔力という存在を確認してから人々の生活への糧となる。魔力を使用することにより、人は火を得、光を得、そして、力を得た。やがて、人が集まり、村が出来、街が生まれ、気づくと国となっていた。魔力による発展は留まる事を知らず、年を追うごとに人々の生活は進

化していく。これはそのような世界で唯一、魔力を持たないという
異端の人物の物語である……………。

異端の人物の日常（前書き）

初めて小説を投稿させてもらう紫霧です。

なにぶん、こういうものを書くのは初めてで、正直、設定や内容もご都合主義な部分がタブンに混じると思います。

拙い作品になるとはおもいますが、適当な目でみてやってください

異端の人物の日常

この世界には魔力というもので満ちている。

それは人であつたり、エルフであつたり、獣人であつたり、動物であつたり、木々であつたり、そして大気であつたり。

それが神族や、魔族だつたり。

『在るもの全てに魔力が存在する』

そんな世界。

大昔、ある人物が魔力という存在を確認してから人々の生活への糧となる。

魔力を使用することにより、人は火を得、光を得、そして、力を得た。

やがて、人が集まり、村が出来、街が生まれ、気づくと国となっていた。

魔力による発展は留まる事を知らず、年を追うごとに人々の生活は進化していく。

これはそのような世界で唯一、魔力を持たないという異端の人物の物語である…………。

1・『異端の人物の日常』

「…………ん、もう朝かの」

木で作られたベットがギリリを音を上げる。

ベットの主は体を起こすと小さく欠伸をこぼし、右手を目を擦った。上下セットであろう青い色の寝巻きはまるで寝起きの主に合わせているかのように軽く乱れていた。

寝癖のついた髪を軽く撫でる。

その髪の色は黒く、ベットについて尚あまる所から、長さは腰元まではあろうか。

ベットの主は開いているかどうか分からない目で部屋の中を見渡す。

部屋は大体四方5メートル程はあろうか。

部屋の中には先ほどのベットやタンスなどといった至って普通な生活感のある部屋になっている。

気になる点があるとすれば、それらの物と全く同じものが合わせて2セットあるということくらいだろう。

ベットから起き上がるとそのままドアの方へと向かった。

「師……。またそのような格好で」

そこには金髪の髪の女性がいた。

髪は大体背中を中心辺りまで伸びている。

女性の近くの窓から朝の光が差し込み、髪に反射し、まるで髪そのものが輝いているように見えた。

彼女はまだ家の中にいるせいかラフな格好で朝食を作っている。

足元には真っ白な『何か』がいた。

それは、奇妙な事に額に翠の色をした宝石が付いている。

他に目立った特長といったら左右ななめにピン、と伸びた長い耳と、額の宝石と同じ色をした目だろうか。

「みゅー、おいで」

「み」

白い何か……。それは秘蹟獣と呼ばれる種族である。

個体数が少なく、其の身には大量の魔力を保有している。

秘蹟獣の特徴はどれも額に宝石をつけていることだ。

額に宝石がついているものがどのような形容をしても秘蹟獣で統一されている。

みゆうは声にして声の主を見る。

主の姿を確認すると、そのまま駆け、足から駆け上がるとそのまま肩まで上りチヨコンとそこに座った。

「ん」。朝ごはんはもうもらったかの？」

何を言っているのか理解したらしく、間を置かず其の言葉に頷く。

「もうすぐできるのでテーブルに座っててください」

「ありがとう、レミリス」

4脚ある内の1つに座る。

その間、肩に乗ったみゆうはバランスを崩すことなくそのままだ。

「そういえば、そろそろ保冷庫の食材が切れそうですが」

「む、もうか。では、食事を買い出しにでもいくかのう」

「そうですね」

「お主はギルドの方はいいのか？」

「別に特には。名指しの依頼があるわけでもないですし」

「そうかそうか、みゅうはどうするんじゃ？」

するとミユウは肩から跳ねて頭の上へと着地する。

衝撃で少し首が揺れる。

「くく、ではお主も一緒だな」

その行動をどうやら一緒に行くという風にとったらしい。

「楽しそうですね」

「うむ、楽しいぞ」

「みゃあ」

その後、テーブルに並べられた朝食を摂ると、各々準備へと入っていった。

フィルモア城下街。

それが、いま2人と1匹のいる街の名前だ。

名前の通り、ここはフィルモア城の元に作られた街だ。

城の周りを覆うようにして街があり、北部、東部、西部、南部とそれぞれ特徴が分かれて形成されている。

まず南部、ここは基本的に市場等になっている。

そのため基本的に一番賑わっている区画だろう。

基本的には店舗を構えているが、中央部が丸い円状になっており、基本的にそこは露天等が開かれている。

時折、その場所を使って南部ならではの色々な大売出し等をやっていることもある。

東部、北部は端的にすると、東部は一般市民の住居となっており、北部が裕福な者達の住居になっている。

そして最後に西部。

ここには公園や闘技場、そして学校等があり、ギルドもここに設置されている。

これらについては後述機会のあるときに……。

「今日も賑わっておるのう」

「そうですね、確か今日は果物の市の日だとおもったのですが」

そういつてポケットの中を漁ると、紙を取り出す。

紙には一ヶ月の予定のようなものが書かれており、そこに細かく中央でどんなことが開催されているのかが記述されていた。

その紙を覗くようにしてみると、それに習うようにみゆつも紙を覗く。

ちなみに、みゆうはというと額の宝石がなくなっていた。

だが、実際には宝石をムリヤリ体内に引っ込めているのだ。

一時期、人間達が秘蹟獣を獲ろうと一斉にざわついた事があった。

秘蹟獣は魔力量が多いという特性と知能が高いということで、希少価値が高いのだ。

この世界の魔力が宿るもので、人や獣、他にエルフ、神族、魔族といった者達が生命活動が停止するとその身を自身の持つ属性の宝石へと姿を変える。

例えば、火の属性なら赤、水なら青。

他にも特殊な属性もあるため色は様々だ。

これについてはこの世界でも魔法の定義の説明も必要なのだが、時間が掛かる為こららも後述。

「セツナさん、レミリスさん、いい野菜あるよっ!!」

「む？」

唐突に声を掛けられる。

その声に誘われるように店内にはいると、綺麗に整頓された野菜や果物が目に入った。

追う様にレミリスも店内に入ると、すぐに店の品物を見始める。

今のポカポカとした日の旬の野菜、キャベツやらグリーンピースやらが店頭が目立つように出ていた。

セツナの方はというと野菜をスルーして果物のエリアへと一直線に移動している。

その様子をみてレミリスは小さくため息を吐いた。

「相変わらずだねえ、あの人も」

「すまない、主人」

「気にすることあねえよ。果物好きなんてのはこの辺りなら誰でもしつてらあ」

「野菜が嫌いというわけではないのだが……………」

そっいつてレミリスがセツナの方に視線を送ると、セツナはオレンジと白桃を持っていて、「どっちがいい？」とばかりに振り返って両手の品物を上げていた。

それに僅かばかり苦笑すると、「仕方ない」とばかり、頷いて自分

は野菜を再度、物色し始めた。

店主もその光景をみて苦笑すると

「毎度あり」

その言葉にレミリスは再度苦笑を漏らした。

「相変わらずの賑わいだのう」

「それは最初にも言っていたではありませんか」

片手にリンゴを食べながらセツナがいうとレミリスが返す。

ふと二人の姿が店の窓ガラスに映し出される。

片や、ラフな格好というべきかシャツ一枚にズボンのみ、腰に刀を一つ携えているだけというセツナ。

ラフな格好に黒い髪が腰の所で揺れている姿、人によって色々な感想がでてくることだろう。

対してレミリスは、背中に背負うように大剣を一つ。

背は精々165を少し超えたという辺りの身長だ。

たが背中に携えている大剣はその背に負けずとも劣らない長さである。

服装も、下はズボンを吐いているが、腰元に皮製の腰当をし剣を一つ、上半身は布製の鎖かたばりのような物を付けていた。

街の中を歩くものの中には、多少の違いはあれどレミリスのように、ある程度防御を固めるとも言うべきか……。

だというのにセツナに関しては防具となるようなものが一切つけられていない。

そのせいなのかどうかかわらないが。

「よう、ねえちゃん。こんな所を女二人で随分暇そうにしてるな」

またか、と。

レミリスはため息を吐く。

自分で言うのもなんだが、傍から見ると、容姿の整った女性が二人とも武器となるものは持ち歩いてはいるが、セツナに至っては防具の類がないため、更に『刀』という一般では全くいいほど広まっていない物も相まって、護身用の武器程度にしか思われていないのだ。

たまに、北部のお嬢様とその護衛と間違われる事もあるほどだ。

この事柄に何度、レミリスの堪忍袋が切れそうになったことか。と、レミリスは思う。

こういつてはなんだが、こんな明らかに、服選ぶの面倒です、みたいな格好をしたお嬢様なんて少なくとも一度もみたことがない。

だが、傍にそれこそ、金の髪を太陽の光で鬱すらと輝かせ見目麗しい、背中に背負った身の丈に合わない大剣を見て、そういう勘違いをするものがあるのだ。

少なくとも、原因の一旦はセツナにあるわけではない。

という事実にはレミリスは全くきづいてないわけで。

こういった時の対応はというと基本的にスルーだ。

セツナはこういう輩の相手をするのが面倒で、レミリスは何度もこういう事があったために、まあ、なんというか慣れた。というか一々反応するのが面倒なのだ。

声を掛けてきた男はそんな二人の態度にめげず、再度、二人の前に回りこむが、二人は綺麗に、その人物を中心に左右に分かれてスルーする。

男の額に小さく筋が立つ。

茶色の髪を首元まで伸ばし、雑に後ろを輪ゴムで縛っていて。顔は、

なんというか一言で言うなら爽やかそうな顔だ。

髪と顔がバラバラなイメージだが、それらも相乗して十分に格好いいと、言える容姿の持ち主だ。

だからこそ、ここまであつさりと無視されたのは初めてなのかもしれない。

腰に携えてある剣に手が伸び、

「そこまでだ」

その一言で男の動きが止まった。

気づくと、男の首下に剣。

切っ先が僅かに触れているらしく、血が一筋流れている。

ふと、気づくと男の周りは囲まれていた。

全員が肩に十字の入った鎧を着込んでいる。

囲まれた男はそこからピクリとも動かなくなった。

そのようなことが起きているというのに、二人はそのまま歩いていた。

周りの店にいる人々は一斉に騒ぎ出して口々に喝采をあげている。

男が両手を拘束された状態で連行されていくのをみながら、先ほど剣を突きつけた人物が顔を覆う部分を外して、既に遠く離れた二人を見る。

「まーた、振られちゃいましたね、隊長」

「黙れ」

辺りに爽快な音が響く。

「いったゝつ。なにするんすか！　いくら本当の事を言われたからって」

「毎回お前はしつこいんだよ。いつもいつてるがあの人はそういう人じゃない」

「じゃあ、逆に言わせてもらいますけど、なんでいつもあの人のことを目で追いかけてるんですか！！」

「……………」

「ほら、やっぱり」

「……………お前に言っただけやる必要はないんだよ」

「なんですか、それ」

「もういいから、いくぞ」

「はいはい」

「あやつにはあとで礼をいわんとなあ」

「……………あれは勝手に出てきただけです。余計なお節介でしかありません」

「あまり悪くいうでない」

「……………大体、貴方もです。たまには『男』らしくなさったらどうなんですかっ！」

「別に私は、『女』らしくしている覚えはないのじゃがのう」

「自分の容姿を振り返り見てから言ってください」

「お主は少々硬いのう」

「……………はあ」

そんな、とある一日の日常

レミリスの力（前書き）

小説って難しいですね；；

唐突な場面転換、訳のわからない台詞、地文。

もっと余裕ができたらしつと修正するんだろうな．．．

レミリスの力

「レミリスさん依頼が入ってますよ」

「私にか………？」

「珍しいこともあるものですね」

「ただ、物珍しいだけだろう」

「確かに最年少更新ですもんね。18でSランクなんて」

「私は最低限の稼ぎがあればいいんだが………」

「相変わらずみたいですネ」

「それはそうだろう。といつかその依頼人は私のことを知っているか？」

「知っていると思いますよ。わかっけていて依頼をしたみたいですから」

「ただいま、戻りました」

「む、戻ったのか」

レミリスは東部にある家に戻っていた。

そこではセツナが片手に食い掛けの梨を片手にもう片手でみゅうの喉を撫でていた。

「…………師」

睨む様に目を合わせると、セツナは少し気まずそうに撫でていた手で頬を掻きながら苦笑した。

「本当に貴方という人は」

「いやいやいや、私は働かないわけではないぞ、決して働いたら負けなどとはだな……………」

「……………」

「え〜と、だな」

「……………行きますか?」

そういつて手元にもっていた紙をピラピラと振るつ。

「ぬう」

その紙をセツナは見ると唸り声を上げる。

どうやらあの紙がなんなのか検討がついているのだろう。
様子をみてレミリスはため息を吐く

(……………相変わらず、この師は)

別にセツナはお金に関して不足をしていない。

少なくとも、生活する分には大丈夫な程度の貯蓄はすでに持っている。

だが、生活する分には大丈夫だが、今は食事情をすべてレミリスが握っている。

セツナ自身を作るよりも、レミリスのが料理はできるので仕方ないとはいえ、セツナに比べると料理に掛かる費用が倍近く変わってくるのだ。

そう、つまり、単純に生活ができないのだ。

だというのに、食費は変わらずに生活ができてるのは、レミリスのおかげなのだ。

さすがに、今更セツナも食費のグレードを下げたいとは思わない。レミリスのギルドの依頼の報酬が食費を抜きにしても、生活に潤いを与えてくれている。

「……………仕方ないのう」

「仕方ないではありません。……………このニート」

「うぬう！？」

その一言でセツナは膝から崩れ落ちた。

「ここが依頼人の家か」

「のう、お主は依頼人が相手でも敬語を使わんのか」

「それをいったら貴方は誰にも敬語なんて使わないでしょう」

「うぬ……」

二人はフィルモアから離れた場所に来ていた。

フィルモアから南に向かつて10キロほど行ったところにある町。

町の名前はレイルマール。

特徴といったものもないごく普通の町だ。

依頼人はこの町の町長。

町のなかで一番目立つ家である。

ちなみに、なぜかセツナは顔は黒い覆面で覆っている。

「それにしても、一番目立つ家とは聞いてはいたんですが」

「そりゃ目立つのう、なんというか悪趣味じゃ」

「ですね」

そして、二人はその件の家にいるわけだが

「一体どこをどうしたら、こうなるのやら」

パット見は普通の……でっかい屋敷だ。

土地だけでも軽く四方100メートルは超えているだろう。

だが門の所には腹を空かしているのが涎をダラダラと垂らした犬。

ちなみに犬の名前は、ベイルハウンド。

魔物である。

通常魔物が人の言うことを聞くということは基本的にはありえない。その理由は首に付いている隷属の首輪の効果だ。

簡単にいうと相手の体内の魔力の循環を首輪に強制的に経由させて相手に物言わせずに無理矢理言うことを聞かせるということところだろうか。

ちなみに、首輪には定期的に利用者の魔力を補給しなければいけない。

更にその奥では真つ黒な鎧が5体ほど並んでいる。

それらにも隷属の首輪がついている。

名前をデモンズベイル。

ちなみに魔物にもランクが分かれている。

ベイルハウンドはランクD デモンズベイルはランクCの魔物だ。

ちなみに魔物のランク、というかギルドのランクもだが、E〜SSSまである。

基本的に魔物のランクとギルドのランクでは3倍ほどの差が目安である。

つまり、ランクDの魔物1に対してギルド所属の人物ランクD3人が対等であるという。

まあ、ホントに目安でしかないのだが。

「…………この調子じゃまだまだたくさん中にいそうじゃな」

「確かにいるでしょうね」

二人はお互いに顔を見合わせてため息を吐きあうのだった。

「ようこそ、おいでくださいました」

屋敷の門を開くとそこには黒いスーツ………というか執事服を纏った人が一人。

「この奥にて主人がお待ちです」

促されるままに二人は屋敷の奥へと歩みを進める。

廊下一つにしたって妙に違和感がある。

傍目にもわかるくらい豪華そうな壺。

というか、壺にこれでもかというほどの宝石が取り付けられている。

壺が豪華というより、壺につけられた宝石が豪華なのだが。

廊下に飾られている嗜好品は全部そのようなものばかりだ。

（外が悪趣味なら内側も悪趣味というわけじゃな）

（ひどい趣味だな）

「こちらです。旦那さま、失礼します」

扉の向こうからの声に反応して、扉を開けると部屋の中へと入る。

「っ、これは」

「……………」

部屋の中にはこれでもかというほど色取り取りの石があった。
赤や青、緑に黄。それ以外にも様々な色の石が。

「ようこそ、おいでくださいました」

扉の先には丸い顔に丸い腹。

一言で言うともあ、丸いという印象しかない男だ。

片手に白いハンカチを持って頬から垂れる汗を拭きながら席に促される。

「早速依頼の話をしたいとおものですが……………そちらの片は」

「……………」

「この人は私の側近のようなものだ、気にするな」

「そ、そうですか。それでは依頼の話なのですか」

「すまんが、私は失礼させてもらう。少し気になることがあるのじや」

「分かりました」

「な、勝手な真似をされては……………」

「好きなようにさせてくれ。あの人は今夜のために地形を把握した
いだけだからな」

「そ、そうですか」

言外に邪魔するなど、瞳に力をいれてレミリスは言っただけなのだが、目の前の男には十分以上の効果があったらしい。

本来なら依頼者に対してこのような態度を取るのは本来いけないことだ。

が、レミリスに関しては別だ。レミリスはある不名誉な二つ名がある。レミリスにとっては

『殲滅者』。

身の丈程もある大剣を携えて、レミリスの属性魔法『火』との相乗効果により、一度だけある場を焼け野原にしたことがある。

大剣を一度振るう度に、3、4人の敵を同時に薙ぎ倒し、圧倒的な魔力を糧に戦場を業火で包み込む。

1時間と掛からない内に、戦場にあるもの全てを消し飛ばした魔法剣士。

無論、本人もそれを知っている。

個人的には心外ではあるのだが、その二つ名のお陰で余計な気を使わずにいられるために、あえて否定しようとはしないのだ。

「では、依頼について話してもらおうか」

こうして、依頼の内容について話が始まる。

「さてと」

かれこれ歩き回って3時間ほどが経過しようとしていた。

フィルモアからの移動時間も考えて、そろそろ外は夜になろうとしている。

この3時間の間にセツナはさらにベイルハウンドを10体、デモンズベイルを5体見つけた

それにしても、とセツナは思う。

これだけの時間を掛けて屋敷を散策したというのに人が誰一人いないのだ。

いるのは魔物のみ。

それにしても、と、なぜレミリスを指定して依頼をしたのか。

レミリスの二つ名はフィルモア周辺でも有名だ。

無論、その二つ名の由来もだ。

だから基本的にレミリスに来る指名依頼はというと、討伐などの依頼なのだ。

なのにわざわざ『殲滅者』に頼む依頼となると

「きな臭いのう。『視る』か」

「…………盗賊から守れ、と」
「ええ、3日前に『ある物』を頂くと」
「なるほど、その依頼をなぜ『私』に？」
「ああ、いえ、ただ守れさえすればいいのです、『確実に』」
「『確実に』…………ね」

（なるほど。師が出て行つたわけだ）

レミリスもほぼ同時に同じ考えに達していた。

自らの武器の特性上、レミリスは加減なんてできない。

大剣を振り回して戦うというのに、殺傷せずに戦うなんてことはできない。

魔法に関しても、如何せん火力重視の魔法ばかりの相性が高いらしいから、こちらも論外だ。

つまりの、相手の依頼人が言いたいのは確実に『殺せ』ということなのだろう。

殺せないにしても重症させれば十分だと。

つまり、そこまでしても守りたい秘密があり、『ある物』の秘密を知ってるものを生かさないということ。

(……………ここで深く問い詰める必要はないか。そちらは師に任せよう)

「要は、確実に『仕留めればいいのだろっ』」

「おお、それなら話は早い。それではお願いしますぞ」

そういつて依頼人はニコニコと似合わない笑顔で送り出す。
レミリスが出て行った後、執事は依頼人に話しかける。

「上手くいきそうですね、旦那さま」

「うむ。『あれ』を知ったものは生かしておくわけにはいかんかな。……………もし、知られたならば」

「分かっております。いざとなれば……………」

そして時は夜。
会合の時を告げる。

屋敷の庭。

数刻前まではいた魔物も周りにはすでにいない。

レミリスにとつては戦場で共に戦うのには邪魔だからだ。

ちなみに、屋敷の主人にはあらかじめ許可を取ってある。

いざとなれば周辺全てを焼き払う許可を。

（自分で言っておいてなんだけど、よくあんな許可がだせたものだ。
……それほど重要なものか）

背負った大剣を構えて横に大きく一振り。
振った後の剣の風が周囲の草を全て薙ぐ。
調子を確かめるように2・3度更に振るう。

「来たか」

数瞬もしないうちに視界に入るのは5人。

全員が全員、黒いローブのようなものに、顔の下半分を隠す覆面。

「ほう、貴様、殲滅者か」

「一応そついわれてはいる。で、お前らは何者だ」

「これから死ぬ者にそんなものをいう言う必要はないだろ」

「随分と陳腐な言い回しだな」

「ハッ、いつてなあ!!」

5人いる盗賊は両手に短剣を構えると同時に飛び出す。
それらを一瞬で見、

「それにしても5人か。少ないな」

飛び掛る5人を1閃して打ち払う。

「チツ。風よ、刃と成りて敵を穿て」

盗賊の一人が詠唱する。

と、同時に6の風の刃が形成される。

「行け」

「焰よ、刃に宿れ。……………そんなもので」

刃に纏わり付くように炎が奔ると、風の刃を同時に叩き落とす。
と、同時に体を大きく捻ると

「飛べっ！」

「チツ!？」

風の刃と合わせて飛び出していた盗賊に向かって、4人に牽制の意味を込めて、炎を飛ばす。

飛ばした炎を、それぞれ、火で相殺し、水で消し、土で閉ざし、風で向きを逸らした。

だが、炎を飛ばすのと同時に強く踏み込む、力の限り踏み込んだ足元は小さく地面が陥没している。

一瞬で盗賊の一人に近づいて剣の腹で弾き飛ばす。

気づいた次の瞬間には飛ばされた相手は門に近い壁へと叩き飛ばされていた。

「次」

「ケッ、まさかこれほどまでとはな」

「言ってる暇があるのか？」

「っと、噂以上にあぶねえやつだなあ。お前らっ!」

大剣と短剣がぶつかり合う。

1合、2合、3合、4合……

レミリスの放つ斬撃は全てともにあたれば必殺の一撃だ。

それをレミリスは自負しているし、セツナもそう思っている。

上段から降り下げるだけの一撃が簡単に地面を割るほどの破壊力だ。だというのに、盗賊はまともに正面から打ち合っている。

あらゆる条件が重なっているが故なのだが

「やりづらいな」

「当たり前だ、お前に、自由にやられたら、1分持つ気がしない」

「ふん、随分と弱気な発言………だな! ……ああ、ホントに邪魔っ!」

頭を下げる。

すると先ほどまで頭のあった場所を火球が一つ通り過ぎた。

(チヨコチヨコと鬱陶しい)

「そこお！」

先ほどまで打ち合っていた盗賊が手に持っていた短剣を上空に放り投げる。

「風よ、撃ちぬけえ！」

宙をクルクルと回っていた短剣に刃先を全てレミリスに向けると、声と共に一直線に向かう。

「器用な奴だな」

大剣を地面に突き刺すと、左手に炎を纏わせる。

「炎よ、なぎ払え！」

左手を振るう。

その手に習うように炎が靡き周囲を全て破壊する。
放たれた炎は地を焼きながら、直も炎が消えることはない。

「なんていう、アホな魔力だ」

地を焼く炎をちょうど境目にして、レミリスと盗賊は外と内に分けられた。

だが、盗賊の4人はそれぞれ咄嗟に動き出す。

「地を這う炎は全てを喰らう。燃き消えろ」

レミリスを中心に半円上に広がっていた炎が爆ぜる。
炎は全てを飲み込むように、一気にその範囲を広げた。

「あれが、殲滅者か」

轟々と燃え続ける炎の中で一人中心に立っている。
その時、クスリとレミリスは笑っているように盗賊には見えた。
その姿をみて、ポツリと声が零れる。

「……………化け物め」

セツナの力（前書き）

前回に引き続き。

というか前回以上にひどいね。これは＝＝；

セツナの力

「さてっと、ここらへんじゃな？ この変な魔力の流動は」

「……………」

「うぬ、これは」

「……………」

「なるほどのう、そういうことじゃったか」

轟々と燃える炎の部隊でレミリスは悠然と歩を進める。

大剣を肩に担ぐように構えると、一歩一歩と。

まるで道を作るようにレイリスが通る直前になると炎が左右に裂けて道となる。

「……………化け物め」

「失礼な奴だ」

大剣を一振りすると複数の炎がまるで散弾のように盗賊達へと降り注ぐ。

振り注ぐ火炎を盗賊の一人が風を使って干渉させて火を受け流す。

「そろそろくるはずなんだが、師は一体なにをしているんだ……」

まるで今までの攻防を全く気にしたように独り言を漏らすと、大剣を真っ直ぐ上空に構える。

まるで其れに呼応するように辺りの空気が変わる。

「おいおい……、冗談だろ？」

足の中から火炎が包み込む。

周辺の魔力を貪欲に貪るようにして、やがて炎がレミリスを剣の先まで覆い隠す。

「紅蓮の業火よ、我が魔力を糧とし、万物を喰らい尽くせ。炎剣一閃」

大きく大剣を一振りする。

ただそれだけで、盗賊のいた場所だけでなく、少し離れた屋敷や小屋、全てを切り裂き、燃やし尽くす。

「なんて、無茶苦茶……っ」

地を、空を、赤い炎の一閃が通り過ぎる。

赤い軌跡はその過程にあるもの全てを巻き込む。

レミリスは一閃を行った後に何も行動を起こしてはいない。

盗賊達は随分と離れたところでバラバラに倒れている。

最後の一閃で建物なども多少壊れてしまったが、彼女が気にすることはない。

最初に言質を取ってあるのだ、最初からそれらを、その時点で依頼人の敷地内で何があるうが関係ないとおもっている。

「…………きた」

レミリスは何かを察すると、大剣を背中に背負い手を振るう。

すると、それだけの動作で轟々と燃え盛る炎は一瞬で消え去る。

「随分と派手にやったのう」

「問題はありません。最初の内に聞いた依頼は果たしました。盗賊の『撃退』は」

セツナはどこから出てきたのか気づくとレミリスの傍にしゃがみ込む体勢でそこにいた。

右手の中には小さな少女がいる。

「クク、なんていう屁理屈」

「所で師。貴方はいつからロリコンになったのですか？」

「お主は失礼な事をいうでないよ」

「さて、ここからが本番みたいですね」

「らしいのお、お主はこの子連れて先に戻ってもらえるかのう」

「一人で？」

「うむ、いくらなんでも派手にやり過ぎて疲れたじゃろ？」

「……………分かりました。では」

レミリスはセツナが抱えていた少女を受け取ると、飛び去っていく。

セツナはクルリと屋敷の方へと向いた。

「まさか、これほどとは」

屋敷の門から出てきたのは、屋敷の主人と執事。

「依頼する相手を間違ったのう」

「まさか『殲滅者』がこれほどまでとは」

「まあ、気にする出ない。あやつはちゃんと依頼をこなしたらしいからのう」

「確かに、確かに、盗賊はどうにかしたらしいが、その代償にまさか、庭の破壊と『あれ』を持っていかれるとはおもわなかったぞ」

「大丈夫じゃ、あの子が一生戻ることはないじやろつて」

「何を言うかと思えば、ここで貴様を殺して、『殲滅者』も殺せばいいだけの話だろうに」

屋敷の主人が指を鳴らす。

それを合図にするように周辺から大量の魔物が現れる。

ベイルハウンド、デモンズベイルだけではなく、それらを統一するように現れる魔物。

獅子の顔と、鷹の顔を持った魔物。

ランクス、キマイラ。

「お主も凄いのう。あれをみてあやつを殺せるといえるか。けれど、それは無理じゃな」

腰に挿してあつた刀を抜く。

刀の切っ先は屋敷の主人へと向けられた。

軽く周囲を見渡す。

「死人に口なしじゃ」

細目の死神はゆっくりとただ静かに口元に笑みを浮かべた。

刀を振るのと同時に、上空に飛び上がる。

最初の一閃で1体のベイルハウンドを斬り裂くと、飛び上がり様
下から上へと振り上げて更にベイルハウンドを1体。

上空から更に一閃して、着地際に更に横に風ぐ。

「これで4体」

気づくとセツナの手元に4つの黄色い魔石がある。

「グルルルル……」

一瞬で4体の魔族がやられたためか、他のベイルハウンドは多少の距離を取って、様子を伺うようにしている。

防御力の高いデモンズメイルが、ベイルハウンドを追い越すように飛び越えると、手に持った剣で斬りかかる。

振り下ろされた剣を刀で流し、地面に切っ先を触れさせると、右足を思い切り剣の中央辺りを足で踏み抜いて叩き折る。

「ぬるいのう」

踏み抜いた足とは逆の左足で頭に蹴りを叩き込む。

するとデモンズメイルの頭部が凹み、そのまま横に吹き飛ばされるとピクリとも動かなくなった。

「一々細々とするのもめんどうじゃの」

タンツと小さな音を立てて体が跳ねる。

跳躍してから、魔物達の密集した地点に飛び込むと、魔石を軽く上に放り投げる。

大きくその場で一回転するように刀を振り抜いた。

刃はそれぞれの魔石を斬りさいて内臓されている魔力を放出。

斬りさかれた魔石は内臓された魔力を放出して周囲一体を吹き飛ばした。

周囲にいた魔物達はそれぞれ吹き飛ばされ、他の魔物を巻き込むようにして倒れる。

濛々と周囲に土煙が舞う。

舞い上がる土煙は程なくして視界を塞いでいった

「っ!？」

セツナは一步後ろに飛び退く。

すると元いた場所を水の球が地面に穴を開けた。

その後、連続して水球が連続して放たれる。

その場で刀を数度振るうだけで水球は全て検討違いの方向へと飛んで行った。

「そこか」

地面に転がる石を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた石は一直線に砂煙の中へと消えると鈍い音をさせて、すぐに何かの倒れる音が響いた。

強い風は吹く。

吹いた風は周辺の砂煙を吹き飛ばす。

そして、現れたのは魔石の魔力の暴発により気絶している魔物と石を受けて呻いている執事。

ここに立っているのは残りはセツナと屋敷の主人、そしてランクSのキマイラ。

「中々やるではないか」

「逆にお主らはぬるいのう」

「温いか。それはコイツを倒してから言ってもらいたいな。行け、キマイラ！」

「キマイラのう」

背に生やした羽を飛ばたかせ空を舞う。

やはりキマイラも首には隷属の首輪を付いていた。

「キマイラのランクはSだ。例え殲滅者といえども勝てるはずはないっ！ お前のようなやつには絶対勝てんぞ！！」

「私はランクというものは知らぬのじゃが」

刀を鞘に仕舞う。

「フハハ、諦めが早いな。それに免じて一瞬で楽に……」

一閃。

飛翔するように飛び上がり、キマイラに反応もさせずに刀を抜刀し背中に生えた羽を斬り裂く。

羽を斬り落とされたキマイラは、抗う暇もなく地面に向かって落下する。

落下するキマイラを追う様にして、セツナも自然、落下し。

——消える

粉塵を伴い、キマイラとセツナは地面に激突する。

「…………キマイラ程度であやつに勝てるはずがないじゃろって」

「なああ!？」

粉塵が晴れる。

そこにいるのは、片手に緑色の魔石をもったセツナの姿。

「キ、キマイラじゃぞ！　ランクSが3人束になったところで」

「それは簡単じゃろう」

そういつて依頼人の前に立ち、セツナは刀を振り払う。

ピツとキマイラの地を落とすと、切っ先を天上に向かって構えた。

「私がそれより強い。…………ただ、それだけの事じゃ」

「や、やめろおおお！」

凶刃が振り下ろされた。

「
今、
帰っ
たの
じゃ
」

「お帰りなさい」

家につく。

セツナの声にすぐにレミリスは反応した。

「食事はもうできてますよ」

「いつもすまぬのう」

カラカラと笑って返すと、傍らに刀を立て掛けると、椅子に座る。

それに合わせて、レミリスはレンジの中から一皿のシチューを取り出す。

「そつえば、あの子はどうしておるのじゃ?」

「私のベットで寝ておりますが……師、もしやあの子は」

そついつて、レミリスが何かを言おうとした所にセツナは指をレミリスの口にあてた。

「なんのことじゃ? あの子は私が拾った子じゃよ。お主と同じじゃ」

「……そうですか」

フワリ、とレミリスが笑う。

それにセツナも笑って返した。

「それでは、私は先に休みます」

「うむ、すまなかったなあ。お主の依頼を邪魔したようで」

「いえ、ギルドの方には適当に報告しましたから、気にしないでください」

「疑いは？」

「さあ？ 私はしっかりと依頼はこなしましたから。後は知らぬ存ぜぬを通すだけです」

「……私は身勝手すぎるかのう？」

「身勝手以外の何者でもないでしょう、というかあれはただの自己中です。……けど、私はそれに救われたとおもっています」

「……そういつてくれると、助かるのう」

「いえ」

寝室への扉を空けてレミリスの姿は扉の向こうへと消えた。

カチャリと金属のなる音と共にシチューを口元に運ぶ。

不意に、扉の開く音がする。

扉の音にセツナは振り向く。

そこには小さな少女がいた。

背中の中ごろまで伸びた銀の髪がユラリと揺れている。

その顔は無表情。

どこを見ているのか分からないようなボーッした赤い目。

子供らしい、大きめな目からは全くといっていいほどに感情を感じ取る事ができない。

「どつしたのじゃ？」

「…………貴方も私が欲しいの？」

「ふむう？」

スプーンを動かす手を止めて椅子から立ち上がると、少女の目の前に移動してしゃがむ。

そしてポンと少女の頭に手を置いた。

「見くびるでない。私はお主のような子供の力を借りずとも生活く
らいはできるし、お主のような子供に欲情するほど特殊な性癖でも
ないのでな」

「……………」

「むう、その目。お主信じておらぬな？」

その言葉に何も反応を示さない。

「うゝん」とコメカミに指を押し当てながらセツナは尋ねる。

「……………お主。秘蹟獣なのか？」

「私が何かなんて私にもわからない」

そういつて少女は自分の額に手を置く。

置かれた手には灰色の秘蹟が見て取れた。

「所でお主はなぜあの屋敷にいたのじゃ」

「知らない。けれど、私に取つての世界はあの部屋の中だけ」

「寂しいことというのう」

ふとセツナは少女のいた場所を思い出す。

屋敷から少し離れた場所の小屋の中に少女はいた。

嚴重に鍵を掛けられた小屋。

セツナはそれを無断で破壊し中へと入った。

その中に少女がいた。

部屋の中はある仕掛けがされていた。

簡単にいうと魔力が使えなくなるようにする仕掛けだ。

部屋の中にあつたものは、剣や魔石など。

そんな中に少女はいたのだ。

目に見える程に衰弱した少女を。

少女の首に首輪が付いているのが見える。

隷属の首輪に似ているが、あれとは違う。

衰弱の首輪。

効果は名前の通り。

セツナは少女の額に魔石のようなものがあるのに気づく。

（秘蹟？ ……だが、形状は人じゃぞ？）

それ故に、屋敷の依頼人は誰にも知られなくなかったのであろうか？

本来、秘蹟獣は発見次第国に申しでなければいけない。

昔の乱獲で一気に数を減らしてしまったが故に、国で管理するような法律が立て挙げられたからだ。

ちなみに、秘蹟獣を国に送る際には、法外な褒章が国から与えられるようにはなっている。

基本的に所持してるだけで国から目を付けられるのだ。

だったらすぐに受け渡したほうが得策だろう。

だが、今まで見受けた情報で人の形を秘蹟をつけたものなど見たことがない。

それだけで商品価値は十分だと依頼人はとらえたのだろう。

しかも秘蹟の色が灰色。

だが、法律でこういったものたちは国に受け渡すように決められている。

そのため疑わしきものは全て消し、外界に情報が漏れぬように、魔力処置を施した首輪で動けぬようにしていたのだろう。

まあ、一言でいえば、少女は商売品だったのだ。

少女の目が開く。

銀色の髪に赤い目。

感情を感じさせないその顔はまるで人形のようなのだ、とセツナは感じた。

「あなた、だれ？」

そんな何でもない言葉に、なぜかセツナは揺れた。

「あの人は……私を売り物だといった。売られるまで大人しくしていろと。貴方は私を買ったんじゃないの？」

「なぜ、私がお主のようなチンチクリンを買わねばならぬのじゃ」

「……………」

間髪なくセツナは返した。

だが、相変わらず少女が表情を変えることはない。

ただ淡々と

「じゃあ、なぜ？」

そんな事を問うものだから

「お主と一緒にいたいと思ったからじゃ」

セツナは不意に言葉が出た。

「お主、自分が分からないといったな？ 実をいうと私もなのじゃ」

少女は首を傾げる。

それを気にすることなくセツナは紡ぐ

「なぜか、私には魔力がなくてな、代わりに妙な力があつてのう」

「妙な、力？」

「私も正直な所、自分というものがわからないのじゃよ。……たまに、人なのかどうか悩む事がある」

「……………」

「それでだのう」

少女の瞳を覗きながらセツナは

「一緒に探さぬか？ 一人でダメでも二人なら見つかるかも知れぬぞ？」

笑顔で、そう言った。

「別に私は自分が誰かに興味ないから」

「うぬう!？」

そこそこの覚悟の元に放った言葉をアツサリ切り替えられて、笑顔のまま固まる。

想像以上にショックを受けたらしい。

下手をすれば少し触れるだけで転がって石像かなにかのように割れてしまいそうだ。

「けど……」

けれど、少女は

「私には何もない。空っぽの私でもいいなら、貴方が何者なのか探すのてっだつてあげてもいいよ」

「……………お主は優しいのう」

相も変わらず無表情のまま、何でもないことのように。

一体、少女が何を思っただけのような言葉を口にしたのは分からない。

セツナは泣きなくなった。

これがこのような小さな少女が吐く言葉が、と

唐突に、セツナは少女を抱きしめる。

「これで、お主も今日から家族じゃ」

「……………家族」

無表情のままに零れ落ちた言葉。

感情も感じさせぬ言葉だが、瞳からこぼれるナニカ。

きつとなぜ流れたのか本人も分からないだろう。

こうして少女は『外』を知る。

長い間隔絶させて小さな世界を離れ、少女は広い世界へと名を馳せる事になるのだが、いまは誰も知らない。

回想（前書き）

半分、この世界も魔力についての話です。

自分でいつのもあれですが、なんか薄っぺらいな

回想

「さて、私は行きますね」

「うむ、帰りは遅くなるのじゃろ？」

「はい。今日だけでも十数件は魔力の補充に時間を取られそうですから」

「それにしても、まさかギルドに家具用品の魔力補充などという依頼があるとは驚きじゃのう」

「仕方ないことです。保冷庫にしてもオーブンにしてもそれぞれ水の魔力と火の魔力が必要になりますから」

「お主の場合は、火だからコンロとかの方になるのじゃろ？」

「はい、では」

そういつてレミリスは家を出て行った。

4
·
回
想

「これで4件目か、先は長いな」

レミリスは空を見上げて、太陽の位置を確認しながら言った。

魔力があつて生活ができるこの世界は、どんなことをするのに多大抵魔力を要する。

いま、彼女の行つ家具の魔力補充もその一つだ。

この世界に在るものは基本的に一人、一つに付き属性を一つしか持たない。

家具……、例えばコンロなどを使用するでしょう。

コンロを使用して調理をする場合、基本的に火が必要になるわけだが、もし、火属性のものが体内にいる分にはかまわないが、いない場合が何かで代用しない限り料理すらできないのだ。

そのため、基本売り出されているコンロ等には予め魔法の術式を構成された人工的な魔石が使われている。

魔石とは、魔力を内在するものがその生命活動等を終了した時にその身をその属性の色に石となり変わる。その石が魔石なのだ。

ここで一連の魔法の動作について説明しよう。

魔法の発動に必要なものは、魔力、イメージ、そして構成力の3つだ。

最初の魔力は無論、魔法を使うための純粋な力。

一人ひとり魔力量は生まれた時からある程度決まっている。

魔力量を上げる方法というのはあるが、それは機会がある時に。

次にイメージ。

例えば、火球を使いたいと考える。

とはいっても想像は人それぞれであろつ。

そのイメージをいかに現実に近いものとして作り出すか。

そのために大抵の人は思い浮かんだイメージに合わせて言葉を発する。

先ほどの火球をイメージしたならば単純に「火球」だけでもよいし、「炎球」でもいいだろう。

その後、例えばその「火球」をどうしたいか？

それに人によって「中れ」だろうが「穿て」だろうが「燃やせ」だろうが構わない。

ただ、言葉を発することによってより明確にイメージすることさえできればいいのだ。

故に、基本的に魔道士はイメージに言葉を合わせることによって魔法を扱っている。

最後に構成力。

これは自らの魔力と大気中にある魔力を上手く混ぜあわせることだ。

例えば火の属性の者が手に50の魔力を身体が出すとする。

だが、その魔力だけでは現実に扱うことはできずに魔力が雲散してしまう。

そのため大気中の魔力も同量の50を集めることによって初めて、それは魔法として現実に扱える代物となるのだ。

だが、この構成が甘い。身体からは50の魔力を出しているのに大気からそれ以上の魔力を、51の魔力を集めてしまうと魔法は発動せずに魔力が雲散してしまう。

逆に身体から100の魔力を集めても、大気から50の魔力しか扱えずにいたら、発動するのは50の力を持った魔法で残りの50は使用できずに雲散してしまうのだ。

ほかにも魔力というのは色々な話があるのだから折り合いする。

ここで今回の魔力の補充について説明する。

人間はエルフ、獣といった生命活動の多くは魔力をいくら使用しても休んでいれば大気の魔力を取り込んで時間を掛ければ補充することができる。

普通なら毎回そのようなことがあれば大気に満ちる魔力などすぐに消えるはずなのだが、先ほどの例で50の魔力を消費したとしよう。すると身体から消費された50の魔力は使用后、すぐに大気の魔力として還元されるのだ。

つまり大気に1000あった魔力が1050となり、そこから魔力を50補充されても大気の魔力は元の1000になるだけであり、何も変わりはないのだ。

この世界に存在するものは半ばある種の永久駆動炉みたいなものになっている。

「次はこの家か」

レミリスはある一軒家の家をノックする。

程なくしてふくよかな体系をした主婦と思われる人物が対応に現れた。

「魔力の補充にこさせてもらった」

「ああ、そうなんですか、それではお願いしますね」

「失礼する」

「この廊下を真っ直ぐいつてくれればありますから。補充家具はコンロだけでだいじょうぶです」

真っ直ぐ行つたところの扉を開けると、そこには一般的なキッチンが見て取れた。

特に目に付く物もなく、コンロの前にいくと、火力を調整する捻りの横にある魔石が目に入る。

今度は魔石と人工的な魔石の違いについて説明しよう。

本来なら生命活動を終了したことにより、魔石は姿を現すものだ。

それによって生じた魔石は生前の生命体の魔力量と同等の魔石へと変化する。

魔石を持つことにより、たとえその者が火属性であったとしても、魔石を介して別の属性の魔法を使用することができるようになる。

だが、魔石の魔力は基本的に使用すると中の魔力が消費されて、一切補充されることはなく、使い切ると、魔石は碎けて魔石そのもの

が大気の魔力へと変換されてしまう。

元は家具に取り付けられているものは通常の魔石だったのだが、消費する度に、魔族等を殺して魔石を得るというのは問題だろうという事で人は新しく生活に役立てる物を作った。

それが人工魔石なのだ。

魔力伝達度の高い鉱石を、家具等に必要な属性の魔道士がイメージと共に言葉を鉱物に刻みつけることにより力を発揮できるようにしたのだ。

これは通常の魔石とは違って魔力の補充ができるため、定期的に魔力の補充をすることによって効果保ち続けることが出来る。

ちなみに、同属性同士なら魔力交換といって、人同士でお緊急で魔力を相互補充することができるようになっている。

「……………これで終わりか」

補充する前は灰色だった石の色が今では赤い色になっている。

十分に魔力が補充された証拠だ。

「あら、すまないねえ。これが支払いね」

「確かに、では、失礼した」

簡単に言葉を交わすと家を出る。

家を出て次の目的地へ向かう道すがら

「…………魔法か」

そういつて、レミリスは指の先に火を灯した。

ふと彼女は思い出す。

セツナの事を。

レミリスがホントに小さい頃に彼に拾われた。

彼女にはちゃんとした家族がいた。

今でも覚えている。

なんてことない小さい村でなんてことない平凡な家庭。

近くの農場で生活の糧を得て生活していた。

料理はもっぱらレミリスの担当だった。

家族の中で火の属性持ちが自分だけだからなのかが覚えてはいないが自然にキッチンがレミリスの場所と化していた。

子供の頃はもつと明るかったとレミリス自身思っている。

あの日、夜盗に襲われるまでは。

その日たまたま、ある用事で村からでていたレミリスは用事を済ませるのに夜まで掛かってしまった。

いまだに襲われた理由などは分からない。

というか、正直あの時の事は良く覚えていない。

気づいたら周りは火の海で、そんな中に私は一人で座っていたのを覚えている。

何日程経ってからだろうか？

レミリスは家族と過ごしていた家の中にいた。

といっても、どこもかしこも火が周りボロボロで、燃えていなかった所を探すほうが難しく、雨風を防ぐ効果もない家の中で、心が休まる暖かな場所も消えて

そこまで考えてレミリスは首を振った。

なぜ、こんな昔のことを思い出したのかとふと疑問に思う。

だが、すぐにその考えに思い至った。

（あの子のせいかな）

と思って、再度首を振る。

あの子のせい、などという言い方はないだろうと。

それに自分とあの子では違いすぎる。

短い間とはいえ家族との団欒があつた自分と、気づいた時から全てを失って……いや、気づいた時からなにもない少女と。

当時、自分の感じていた空虚とあの子の空虚は別物である。

失ったことから、何もしたくない、このままいっそ……とおもったレミリス。

気づいた時から、何かを失う事はなく、それ以前に何かを得ることもなく、ひどく、不安定な何かを感じさせる少女。

ほら、見る。全然違うではないか、と。

ホントにどの程度経っただろう。

気づくと、周りには黒い何かが高く詰まれるようになっていた。

自分を中心に時には折り重なるように、時には崩れるように。

もう村にはなにもない、それもそうだ。すべて焼けてしまったのだから。

だというのに、盗賊の類が何度も『元』村を何度も襲ってくる。

その度に、それらは気づくと黒い何かに変わっていった。

更に数日が経つと、レミリスも何かい気づくようになっていた。

あの日みた、燃え盛る村。

周りにある黒い消し炭。

事あるごとに、何もない『元』村を襲う盗賊。

ああ、そうかと。この地獄を作り出したのは自分なのかと。

家族をなくしてから彼女はその日初めて笑った。

笑わなければその事実が心で狂ってしまいそうで。

真実は、村を襲われのは当初は単純に強盗と変わらない目的。

だというのに、もう何もない村をいまだに襲っているのは、レミリスの魔力の高さが盗賊に知れ、同じ盗賊の一味がその後、レミリスを狙っていただけだ。

この世界には人買いがある。

やはり、暮らせなくなる家庭とはいうのはある。

その食い扶持を減らすために、子供を捨てるなどという話は普通にある話なのだ。

だが、この世界はどんなものにも魔力の在る世界だ。

単純に魔力量の高い子供は高く売れる。

だからこそレミリスはずっと狙われ続けていた。

だが、半ば無意識に魔力を練り、イメージをし、構築された魔法は、そんな彼女を攫うことを許さなかった。

その事実気づいて、更に数日。

もう何日が経ったのかすら考える気力も起きなくなったとき。

彼は私の前に現れた。

「……………過去に憂いを持つなど、私のガラじゃない」

——さあ、早く仕事を済ませて帰ろう。

——きっと彼お腹を空かせて待っている。

——あの、暖かい場所で

私は絶対にわすれない。

あの時、貴方のいってくれ言葉。

全てを失った私に、泣けなくなった私に、代わって泣いてくれた貴方。

人の意見も聞こうとしないで、自分の我侭を押し通す貴方を。

—— 一緒に暮らすか？ といっても、お主の意見を聞くつもりはないがのう。なに、私もそろそろ一人は飽いた所じゃ。

「……………泣きながらいう言葉じゃ、ないですよ」

—— 父様、母様、私はまた、笑えますよ

どこまでも青い空に、手を翳して日を遮ると、彼女はクスリと微笑んだ。

魔法学園（前書き）

まあ、最初の頃から思っではいきましたら、なんていうか突発てきですわね。

急な場面変換とか、人によつては、というか下手したら大半の人が話しの展開、流れが滅茶苦茶だとおもつてゐる人もいます。まあ、それでもこうして書き始めた以上は完結はさせたいので稚拙な作品ではありますが、どうか気長にいまでやってください。><;

魔法学園

ある一人の女性が西部のある家の門の前に立っている。

「ここに来るのも、久しぶりね」

全体的に青をメインにした服装。

全体的に細めの身体をし、身に纏う衣服は、全体的に露出が大きく、胸にいたっては豊満なせいもあるのだろうが、服で覆いきれずに今にも毀れてしまいそうになっている。

髪はまるで、衣服に合わせたかのように同じ青色で統一され、大体首元まで伸びており、毛先にはウェーブが掛かっている。

手には杖を持っており。杖の先にはこれまた青い魔石が付けられていた。

「セツナさん、いますー？」

青髪の女性は家のドアをノックする。

ノックと共に声を出すものの、1、2分まって何も返事はない。女性は首を傾げながらも、再度ノックすると、声を上げた。すると、今度は1分もしないうちにドアが開いた。

「……………何のよう？」

ドアの向こうからでてきたのはレミリスだった。

だが、なぜだろう。どこかおかしい。

彼女は再度首を傾げる。

頭の上から足の先まで見てはみるが、どこか違和感を感じるが、なにに対しての違和感なのかが分からない。

「……………何のよう？」

レミリスは彼女の様子に気づかずに再度、同じことを言った。そこで彼女は気づく。レミリスの声に何か感じるのだ。

「…………レミちゃん、もしかして不機嫌？」
「イ・イ・エ」

妙に凄みを感じさせる言葉で言い返すレミスに彼女は（図星か）と心の中で呟いた。

（一体、セツナさんなにをしたのよ、も〜）

半ば八つ当たりを喰らったと本人は思っている。

「あの人なら中にいる」

「ハイハイ、それじゃあお邪魔するわ。…………なるほどね〜」
「おお、メイシエア。久しぶりじゃのう」

女性の姿を視認して、言葉を返すセツナ。

女性——メイシエアはセツナの姿を見ると、レミスが不機嫌なの理由に納得する。

セツナはというと何日か前に一緒に暮らすようになった少女。

「セツナさ〜ん。その子はどうしたんです？」

「この子？ この子は新しい家族じゃ。名前はアリサという。よろしくやってくれ」

「あら？ そうでしたの」

セツナはアリサを膝の上に乗せて顎をアリサの頭の上に乗せていた。抱きかかえられているアリサはというと、相も変わらず無表情でセツナにされるがままになっていた。

「どつりでレミちゃんの機嫌が悪いわけだわ」
「いい加減、人を変な呼称で呼ぶな」

「いいじゃない、『レミちゃん』。かわいいでしょ?」

「あんまりふざけると追い出す」

「はいはい、あたしが悪かったわよ」

まるで勝手知ったるなんとやら。

セツナの横にレミスが腰を下ろしたのを見て、メイシアもセツナの対面に位置するように席に着いた。

「それで、お主は今日は何用できたのじゃ?」

「あら? 用がなくちゃ来ちゃいけないの?」

「そういうわけではないが、お主が来るときは大抵そうじゃろくに」

「あれゝ、そうだったっけ?」

ふざけた調子で答えるメイシアにセツナはあきれたため息を吐く。吐いたため息がくすぐったかったのか膝の上に座らされていたアリサが小さく身を振った。

その様子に気づいたのか、セツナはアリサを自分の横に下ろすと

「アリサ、少しみゆうと遊んできてもらえるかのう」

「……………」

言われて数瞬考えたように視線を巡らすと、やがてコクンを領いた。

「すまんのう」

擬音でトテトテとでも聞こえそうな足取りでアリサは扉の向こうへと姿を消す。

「ところで、お主は結局何の用なんじゃ?」

「え、あ、ああ、そうねえ。それで本題なんだけれど」

目の前の映像をどう捉えたか分からないが、メイシエアは一つ頷くと、本来尋ねてきた理由を話し始める。

「生徒の護衛の。なせ私がそのようなことをせねばならぬのじゃ」「いいじゃない。本当はレミちゃ、…………レミスに頼もうかと思っただけ、まさか学生の護衛にランクのギルドのメンバー借りるのは大げさだし、今回はダンジョンを使用するから」

「なるほどのう」

「私では狭い空間での戦闘には向かないですから、妥当ですね」

セツナの言葉に合わせたかのようにレミリスも答える。

「だが、私も暇ではないしのう」

「貴方は何時も暇してるじゃないですか」

「んむ？」

疑問符を返すセツナにレミリスは素知らぬ顔で手元のお茶を啜った。
あんまりな言いように細目を少し垂れさせてレミリスに習うように
お茶を啜る。

口に含んだお茶をコクリと飲み下ろすと、顔をメイシエアの方へと
向けた。

「で、なにか報酬は？」

「えゝ、セツナさん、なにか取るんですか？」

「当たり前じゃ。世の中はギブアンドテイクで成り立っております」

「あゝ、それなら将来の有望な人材を育成すれば後々楽になります
よ？」

「そんなもの私とは関係ないじゃろう」

「……ふゝ、それでしたら、報酬はからだで「いらん」……………」

メイシエアの言葉が本気だったのかどうか分からないが、セツナは
三文字で返して終わる。

あまりの即答振りにいい事思いついたとばかりの表情をしていたメ
イシエアはそのまま固まった。

そのまま数十秒、「はあ」とレミリスがため息を吐くと、どうやら
お茶がなくなったらしく席を立つ。

椅子を引いた音が響いて、メイシアはようやく再起動を果たす。

「仕方ないわね。後で私のポケットマネーからいくらか出すわ」

「ふむ、お主のポケットマネーではあまり期待できんが、まあよしとするかのう」

カラカラと笑うと、セツナはテーブルの脚に立て掛けておいた刀を手にとって、脇に差し込んだ。

「では行くとするかのう？」

「あら？ もういくの？」

「学園に行くのも、久しいしのう。どうせだから、少しくらいブラつくのもよからう？」

「あゝ、一応、学園が部外者禁止の施設でもあるから困るんだけど

……」

「あんまり細かいこと言うでない、禿げて、老けて、皺できるぞ？」

「私は女だし、若いし、皺なんてできないわよっ！」

「冗談じゃよ」

「……………相変わらず性格悪いわね」

「ほれほれ、早くいくぞ」

「はいはい、じゃあごめんレミリス。セツナさん借りていくわね」

「あんまり遅くならない様にとでもいっておいて」

「了解了解」

養成学園クレメント。

フィルモア周辺の国の子供達なら無条件で通うことの出来る学校だ。魔法の基本的な事から、属性の専門的な事。社会や政治等、それらものを習う事ができる所だ。

フィルモアに近隣にある村の子供達も大抵はこの学校に通っている。学園を卒業する際には、その先の将来の事も考えて、国に仕える事もできるし、冒険者、それら以外の物を選ぶことも可能だ。

基本的に給与や名誉等の関係が国に仕えるものが多くなるのだが、時折それらとは別のものもいる。

ちなみにメイシエアはこの卒業生ではあるが、なにがあつたのか学園で教師となつて仕事をしている。

学園の教師は全員基礎魔法の担当をしている、メイシエアは水属性の専任担当でもある。

「こうして来るのは何年振りじゃったかのう」

「少なくともあたしが学園で教師をしている間に見た事はないわね」

「最近は色々と物騒じゃからなあ」

訳の分からないことを言つて笑う。

「物騒つてなによ」なんて思いながらもメイシエアは学園の門を過

ぎる。

セツナもその後を追って門に入ろうとしたのだが門の傍に経っていた警備員らしき人物にそれを止められた。

「失礼しますが、身分証の提示をお願いします」

「んぬ？ 身分証とな」

警備員の言葉に困ったように頬を掻く。

その様子に気づいたメイシアはセツナの方に歩み寄ると小声で声を掛けた。

「セツナさん。身分証は？」

「私はギルドのランク証なんぞはもっておらんぞ？」

「ちよっ！ なにそれ、あたし初耳よ！？」

「耳元でうるさいのう」

「じゃ、じゃあ前にセツナさんの行ったダンジョンの依頼はなんなのよ！？」

「あれはレミスが受けた依頼を変わりにやっただけじゃ」

「な、なにそれ。それって契約違反じゃない。もしギルドに知れたら……………」

「なにをいつておる。ばれておらんのだから私とレミスはここにいるんじゃない？ だいたいこのう、私は縛られるのがきらいなんじゃ」

口で「イーッ」とでも表情を作って耳を塞いで、なぜかイイヤヤと首を横に振る。

それを見てメイシアは（どこの子供だ）なんて思いつつもため息を吐いて、警備員に近寄ると懷から何かを取り出す。

「ギルドライセンスAAA クレメント学園教師メイシアの名において、この者が害成す人物でないことをここに示す」

「……………条項10、了解です。ただし、もし何かしらの問題があった場合は」

「はいはい、責任でも何でも押し付けられて構わないわよ。じゃあ、行きましょ」

手をヒラヒラと振って警備員に返事を返すと、再度メイシアは学園へと歩を進め、それに習うようにセツナも学園の中に足を踏み入れた。

門を過ぎてまず目に入るのは真っ直ぐな道。

道は大体幅が5メートル程あり、道の左右には左右対称になるように何かの木が植えられていた。

そして通路の果てにある建物が学校、曰く学び舎なのだろう。

「それにしてもここの学園は、ホントに厳しくなったのう」

「それは仕方ないわ。昔ならいざ知らず、ここには貴族のボンボンもいるんだから」

「お主も相も変わらぬ口の悪さじゃ」

「それは関係ないっ!」

メイシアの態度に笑みを零すとセツナは懐かしむようにグルリと見回す。

「まさか、この学園がここまで閉鎖的になるとはのぉ」

「閉鎖的って、ただなるべく外部との接触を断つようにしてるだけでしょ」

「十分じゃ。まったく、幾ら国中から生徒が募るとはいえこれはどうかと思うがな」

セツナが言つたとおり、ここの生徒は基本的に外部との接触は0だ。だが、メイシエアにも言い分があった。

過去に今回と同じように教師同伴の元に学園の中へと入ったギルドの冒険者がある貴族の令嬢を誘拐しようと画策した。

その冒険者は令嬢を薬で眠らせると誰にも気づかれぬように外へでようとしたのだが、たまたまそこをメイシエアが居合わせてしまった。

冒険者に抱えられるようにして眠る令嬢の姿を見てメイシエアは瞬時に判断。冒険者が行動を起こす前に一瞬で無力化させるとそのままその冒険者を城へと引き渡すなどといった過去のエピソードがあったのだ。

「今思うと、あの冒険者も馬鹿よね。普通に攫うならダンジョンに行つてからのがやりやすかつたでしょうに」

「イヤ、お主論点がずれておるぞ」

「あつと」

少し首を左右に振つていま考えていたどうでもいいことを頭の外に出す。

「まあ、外部との接触を断つといつても、絶対ではないし少なくとも夏期休暇か冬期休暇の際にはそれぞれ家に帰るなり好き勝手やるんだから問題ないでしょ」

「いやいやいやいや」

セツナはそれはないとばかりに首を振るうが聞こえてないのかメイシエアは再び校舎へと歩を進める。

（歪みに歪んで変な学園になったのう、ここも。自分たちの言ってる事が事あるごとに矛盾してる事にきづいておらんのか？）

などと思いつつもセツナはメイシアの後を追う。

数分もしないうちにセツナはメイシアと別行動を取っていた。
といってもメイシアは学園の校舎の屋上にいる。

屋上のフェンスに肘を掛けるようにもたれ掛かりボーっと空を眺めているだけだ。

「ここからの景色も懐かしいのう」

この学園は城を除けば城下町で一番高い建物だ。
ここからなら西区全てが見渡せ、多少なら北区、南区の様子も見て
取れるくらいの高さがある。

「眠い。こういう日は家でダレているのが一番きもちいいのだがの
う」

大きく欠伸をすると目を擦る。
ふとセツナの頭の中に「このニート」とレミリスの言葉が聞こえた
気がして首をカクンと落とす。

「仕方ないのう。確かに家計をレミリスにまかせつきりなのが現状だし」

空から降り注ぐ陽気は否応なしに眠気を誘う。

陽の光を全身に浴びながら、両手を広げて高く伸ばすと体全体をしならせる。

「さて、いつまでもこうしておるのもいかんのう。集まっておるみたいだし、」

フェンスを掴む。

視界の下には校庭らしき場所に集まっている人の姿が見て取れた。フェンスを掴む手に力を込める。軽い音を経て跳ねるように跳ぶと

「私も行くとするかの」

一瞬後、その姿は屋上から消えた。

「ああ。つたく、セツナさんったらなにしてるのよ」

メイシエアは生徒の集まる前で視界の影になるように爪を噛んだ。
生徒達、教師、外部協力者の者達の姿の中、どこを見渡してもセツナが見当たらない。

後数分もすれば、全員が集まり集会が始まる事だろう。

ウロウロと歩き回る姿から、生徒達の目から見ても明らかにメイシエアに落ち着きがないのはわかっただろう。

「もう、こんなことならあの時別れるんじゃないかなかったわ」

といつても後悔先に断たず。

何も知らされてないメイシエアには場所を知る手段はない。

生徒達がいくつかのグループに分かれて今か今かとダンジョンに行くのを待っていた。

生徒達の先には教職員らしき者たちと今回の協力者となっている人々が一列になって並んでいる。

それらの人物とまるで分けられるようにして校庭に一つだけ置かれている台の上に一人の男性が立っていた。

「えー、生徒皆さん、全員集まっていますね？ これより、今回のダンジョン内にて協力される方々を紹介させていただきます。今回のダンジョン実習の総責任者となる、ウェルフ・レッドギンスです」

台の上で声を上げている男性、ウェルフは男性にしてはやや高い声でそういうと生徒一人ひとりを確かめるように見回す。

「まずは今回の協力者の方々の説明をさせていただきます。では、協力者の方々、順に紹介の方をお願いします」

台の右側に並んでいた内の一人が前に出る。

背に二本の大剣を携え、その纏う物は頭を除いて真っ黒な全身鎧。そこに立っているだけで威圧感を感じさせる。

踏み出した足が、小さく音を立てる。

身に纏う物を雰囲気のせいか足音は小さなものに関わらず重々しいものを感じられた。

「ソウマ・イルステイン。ギルドランクはA」

そう端的に告げただけで後方に下がる。

それを見てそのすぐ横にいた男が前に出る。

「俺の名前はレオ。レオ・ステイルだ。ギルドランクはB B B。よろしくなっ！」

先ほどの男とは打って変わって明るい声で紹介する。
オレンジ色の短い髪が特徴の青年だ。

まだ少年らしさの残る、その姿はどうやら生徒達にも好感を与えたりしく生徒達が騒ぎ出す。

「ウチの名前はライカや」

レオが下がるのと同時にまるで身軽さをアピールするかのよう飛び跳ねると言った。

茶色の髪は所々跳ねており、自己紹介をするとまるで触覚のようにピョコッと二本の髪の束が現れた。

「ギルドランクはA。皆、よろしくな」

手を大きく振るとそれに合わせる様に触覚のような髪が左右に揺れる。

猫のような細目が愛嬌の良さを感じさせられる。

「次は私ね」

ライカが後ろに下がると唯一今回の協力者の中でゆったりとした口癖を着、物理的打撃を目的としない杖を持っていた。

「私の名前はルミナ。ルミナ＝H＝クレセント」

女性の言葉に一気に周囲がざわめく。

ルミナ＝H＝クレセント

この世界では基本的に名前は通常は「＝」「＝」というのが普通である。

名前の中のFとはこの国の王により与えられたいわば称号のような

ものだ。

癒し手を表すH。つまりこの国の守護を意味する。

この国には他に他に殲滅者を表すA、Gとはガーディアン、そして勇猛ななどの意味を表すB。

これらの四つがこの国にある照合の全てである。

風が吹いた。

吹き付けた風はルミナの髪を揺らし腰元まである髪が右に傾く。

その際にルミナの髪の中から左右に飛び出るような感じに尖った耳が現れる。

「私はハーフエルフよ。ギルドランクはS。よろしくね」

ゆつたりと、見方によつては優雅にルミナは挨拶を終えると他三人の協力者の横に移動した。

「へー、あんたどつかで見た事あると思ったけど、癒し手やったんかあ」

「ええ、といつても私は次女だから」

クスリと魅力的な笑顔で横にいたライカに返す。

その顔を見てライカは表情を赤らめた。

「あかなあー。なんであんた見たいな人が冒険者までやっとなねん」

恥ずかしげに頭の後ろを掻く。

そんな様子を見て再度笑みをこぼした。

「私はいつか家を出るためにね。やっぱり手っ取り早いでしょ？」

冒険者になるって」

「手っ取り早いって」

今度はライカが呆れた様に笑う。

確かに真面目に仕事を探すとなると普通の人は大変だろう。

どんな仕事に就くとして基本的に魔力を持つ者が優遇される。

一般人の魔力量は冒険者のような人々からしたらほんとに微量の魔力しかない。

その点ルミナは別に魔力は低いわけではない。

むしろ逆に高すぎなくらいだ。

それに大体クレメントといえば癒し手を継いで来た家系でもある。

そのネームバリューだけでどこにでも優遇されるだろう。

別に癒し手じゃなくても国に仕える事も容易い。

わざわざ命懸けな冒険者にならずとも、戦争などあったとしても後方で怪我人を癒す医療班に所属すれば命の危険もなく、癒し手の家系であることも考えると随分と優遇されるだろう。

「ふん。まあ、理由は聞かないでおくよ」

「大した理由ではないですけどね」

校庭に集まった者達が騒ぐ。

それは生徒達も例外ではなくあちらこちらで声が飛び交う。

「ふゝんあれが癒し手か。にしてもハーフエルフね」

「なになに？ ハーフエルフだと何かあるの？」

「んにゃ。ただ単にエルフが珍しいだけ」

「そうだよねえ。エルフていったら普通は森に住んでる者だもんね」

「あんた等、無駄話してないで黙れ。いつになっても終わらないだろ」

「あゝはいはい」

「ごめんね」

少年は肩を竦ませて返事する。

まあ、声のどこにも悪びれた感じはないが。

呼応するように間延びした声で少女が謝ると眼鏡をキラリと反射させた少女がはいき荒く教職員の方を向く。

そこには協力者の内の女性二人が何かを話しているのが見えた。

対称的に最初に紹介していた男二人は一言も声を発さない。

ソウマは目を瞑って腕を組んだまま黙り、レオは相変わらずニコやかな表情を崩さないでいた。

「リーリカさん？　どうかしたの？」

「……………」

妙だった。

他がいくつかのグループに分かれている中でなぜかこの二人だけが孤立しているように見える。

あえて言うなれば少女の二人のうちの片方が人目を引く容姿だからなのかもしれない。

まるで色というものを知らないかのような白い髪。

それとは対称的な真っ黒な目。

この二つだけでも強い印象を感じられる。

だというのに、更にそれを際立たせるかのように、右目を眉毛の上の辺りから一直線に口の横にまで及ぶ傷跡。

それが相まってか、どこか周囲に拒絶的な雰囲気を与えている吊り上った目が更に印象強く感じられた。

「……………誰かいる」

「え？」

リーリカと呼ばれた少女は一体なにを感じていたのか分からないが
じつと上を見ていた。

それに習うように一緒にいた少女は上を見る。

「ひ、人おおおお！？」

瞬間、一緒にいた女性の絶叫が響いた。

台の上でウェルフはコメカミを手で押さえて頭を振る。

（はぁ。だから四天の系譜の方を呼ぶのはイヤだったんですよ）

目の前で騒いでいる生徒達。

これはそう簡単には収まらないだろうとため息を吐いた。

ガシガシと頭を掻くと、どうしようかとウェルフは考える。

（ああ、うざったい。一発校庭の真ん中にもぶち込んでやりましようか）

……訂正。

考えていなかった。

いや、一応考えたのかは知れないが、もし真面目に考えていたらこんな案は出てこないだろう。

だが、考え直すつもりはないのか右手に魔力を集めて周囲の魔力を取り込み徐々に小さな風が右手の中に集まっていた。

何人かの教師や生徒達はどうかその状況に気づいたらしい。

慌てて教師陣が止めようとし

「ひ、人おおおお！？」

響いた絶叫に魔力が雲散し、辺りに轟音が響いた。

轟音の鳴った地点から煙が舞い、周辺の視界を消す。

時間が立てばやがて消えるであろう砂煙は、今は一向に消え去る様子が見えない。

それを見てウエルフはそよ風を起こす程度の魔力を轟音地点に放つ。すると、煙は瞬時に晴れ、やがて轟音を立てた「もの」が姿を現した。

「コホツコホツ。ういゝ。少しは派手に行き過ぎたのう」

「せ、セツナさん!？」

煙の中から現れたセツナを視認してメイシエアは声を上げた。メイシエアの姿をみるとセツナは手を上げて答える。

「おお、メイシエアかすまなかったのう。遅刻してしまった」

カラカラを笑い声を上げて返すセツナにメイシエアは啞然。

いま目の前で起きたことはただ遅刻してしまったが故に起きたことなのかと。

「……………メイシエア先生、彼女は？」

「あ、ああ。はいはい」

メイシエアはセツナの傍に近寄り耳打ちするとセツナは其れに頷いて

「私の名前はセツナじゃ。ギルドランクとかいう無粋な物はもっておらぬが、一応メイシエアの紹介でここにきた。まあ、適当によるしくのう」

長い黒髪を揺らめかせながら、猫のような細目はライカと同じく愛嬌を感じさせるが、しかし、他の協力者と見比べても、装備などという言うのもおこがましい、Ｔシャツにズボンという格好、今の言動で生徒、教師、協力者の中の一部を除いて全員が思った。

（（（（ああ。こいつはダメだ（（（（（と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315h/>

Clumsy bonds

2010年10月11日18時05分発行